

医学部・医学研究科

I	研究水準	研究 6-2
II	質の向上度	研究 6-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、インパクトファクター（IF）が 13.0 以上の国際的に高い評価を受けている学術誌への報告が多い。21 世紀 COE 拠点形成プログラムに参加した 20 名に関する論文だけで、平成 19 年は 333 件に及んだ。また、大学院博士課程の学生による研究論文(レフリー付学術雑誌)は、322 件～378 件である。研究資金の獲得状況については、文部科学省及び厚生労働省の科学研究費補助金の採択数は平成 16 年度の 493 件から平成 19 年度の 582 件に増加、受け入れ金額も約 30 億円を推移している。また 21 世紀 COE プログラムが 2 件、科学技術振興調整費 5～10 件、NEDO が 1 件等の大型研究費の取得も順調であり、受託研究も 75～86 件、民間等共同研究は 46～95 件と活発である。さらに競争的資金による特任教員が、助教(助手)から教授に到るまで、毎年 106 名～132 名にのぼっていることなどは、優れた成果である。

以上の点について、医学部・医学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、医学部・医学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

2. 研究成果の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、統計科学、神経科学、発生生物学、解剖学、薬理学、医化学、病態医化学、免疫学、医療社会学、衛生学、消化器内科学、代謝学、血液内科学、精神神経科学、放射線科学、脳神経外科学、整形外科学等で多くの卓越した研究成果が生まれている。聴覚における神経軸の突起形成、骨髄間質細胞からの神経細胞及び筋細胞分化、炎症あるいは炎症時の頻脈におけるトロンボキサンとプロスタグランディンの役割、自己免疫疾患の分子機序、甲状腺腫瘍細胞の転移能力獲得における N-ras の役割、精巣細胞由来の多分化能細胞の樹立、免疫グロブリンのクラススイッチのメカニズム、カルシウム制御における α -klotho の役割、TGF β 産生と線維化における IL-13 の役割、家族性脳動脈瘤の疾患感受性遺伝子の解明、ピロリ菌感染による胃上皮細胞の活性化機構、糖の

細胞内取り込みの分子イメージング、月経困難症の MR 画像診断、骨軟骨前駆細胞の研究、T 細胞を介する自己免疫関節炎におけるサイトカインの役割等、多くの卓越した成果が生まれている。また基礎医学、臨床医学の各領域で多くの優れた成果を上げている。社会、経済、文化面では、血液内科学領域においてイマニチブ耐性白血病における Bcr-Abl 抑制薬に関する研究で卓越した成果を上げたことなどは、優れた成果である。

以上の点について、医学部・医学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、医学部・医学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は5件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。